

# 球磨工業高校 教務だより 3月号

「才能と努力」

令和4年(2022年)3月24日発行



令和3年度が終わります。4月からは新しい学年になり学校での立場が変わることで、生活や行動の変化が求められます。新3年生は、最高学年として各科や各部活動の先頭に立って、組織をぐいぐい引っ張っていくことが求められると同時に、全体を見てフォローが必要な人や課題を見つけて、手助けしたり修復したりすることも求められます。新2年生は、後輩(新1年生)が入ってくることで、模範となる言葉遣いや行動が求められると同時に、後輩たちからの質問に的確に答えるために、「何のためにやっているのか」、「どのレベルまで求められているのか」を自分の言葉で説明することが求められます。悪い答えは「先生(キャプテン)に怒られるから」などですね、怒られたくないからやるって後ろ向きな目的なので、やるべき事には前向きな目的を持って取り組みたいものです。もし、学校生活の行動一つ一つに前向きな目的が見つからない場合は、今のうちに先生や先輩としっかり話をし、自分なりの答えを見つけてください。誰も前向きな目的が答えられない行動は、意味がないので見直した方が良いでしょう。そのようにして、組織の改善と修復に関わっていくことが2年生以上には求められるのです。当たり前を疑う、タフな思考と行動は、確実にあなたを成長させます。

自分の成長と組織の成熟には、「人と関わる」「地道なことを継続する」「小さな変化に気づく」などが重要です。それが自然とできる才能の持ち主もいますし、意識してできるようになるための努力を要する人もいます。皆さんが将来どんな生き方を目指すかによって、自分の才能の活かし方や、自力をつけるための努力の方向性が決まってきます。この春休み、しっかりと時間をとって自分を見つめ直し、また4月に会いましょう！

4月 2022.April 令和4年・卯月			木/thu	金/fri	土/sat	日/sun
			31	1	2	3
月/mon	火/tue	水/wed				
4	5	6	7	8 (服) 新任式・始業式 午後：入学式	9	10
11	12	13	14	15	16	17
部活動紹介 交歓会	新入生考査	検尿①	眼科検診(2年・専攻科) 検尿①(予備)	クラス役員集合 部活動編成		
18 代休(4/23)	19	20 (短)	21	22	23	24
		校内美化作業	内科検診(1年)	校内美化作業(予備)	育友会総会 部活動保護者会	
25	26	27	28	29 昭和の日	30	31
	検尿② 新体力テスト	心臓検診(1年) 検尿②(予備)				

## 努力の価値

体育科 迫 宏一

小学4年生の時にサッカーを始めて30年が経ちました。今でこそ選手達に偉そうなことを言う立場ですが、私自身はサッカー選手として特別な才能は何も持たず、上手い下手で言うなら完全に「ハタクソ」な選手だったと断言できます。高校3年の最後の大会、県ベスト4を懸けた試合では登録メンバー20名にも入ることができず、ベンチの後ろで試合に出る権利を持たないまま高校サッカー引退の瞬間を迎えました。大学サッカーでも150名を超える大所帯の中で4年間を一番下のカテゴリーで過ごし、(それはそれで困難に満ちた、しかし心躍る冒険の日々でしたが)トップチームのように全国大会に出場することもなく、4年次のリーグ最終節を最後に競技スポーツの選手としては一線を退きました。

先ほども述べたとおり、私にはサッカー選手に必要な「才能」と呼べるものは何もありません。スピードもサイズも人並み、特別スタミナがあるわけでも技術的に優れているわけでもなかった私は、「与えられたポジションはどこでもやる」という使い勝手のよさはあったかもしれませんが、誰からも認められるスーパーな存在では決してありませんでした。

ただ、だからと言って「才能に恵まれないこと」がサッカーを諦める理由にはならなかったし、むしろ「特別な何か」を持たないからこそ、考え、努力し、自分より上手いやつらにどうすれば勝てるかを試行錯誤してきた競技人生だったと言えます。そして、「特別な何か」を持たない私にとって、勝負の世界で生き残るためには「頑張る力」が欠かせませんでした。それが生まれ持った「才能」だったのか人生経験の中で手に入れたものだったのかはわかりませんが、「頑張る力」だけは常に私の中に存在し、逆境に向かうエネルギーを与え続けてくれました。

これらの経験が、指導者としてのスタンスにもつながっていると思います。

現在指導するチームには当時の私より「才能」に恵まれた選手が沢山いますが、そうは言っても県の上位や全国大会に進出するチームと比較すれば厳しいものです。「トップレベルではない」のが現実であり、努力で能力の差を凌駕していかなければなりません。だから、選手達には「日常を“本気で”変える」、「迷った時は苦しい方を選べ」と求め続けています。

このように競技スポーツの世界で高校生を指導する日々ですが、誤解を恐れずにいえば、私は勝つこと自体にさほど大きな意味があるとは思っていません。そりゃ勝つか負けるかだったら勝つ方がいいに決まっているし、勝たないと見えてこないものは沢山あります。でも、本当に大事なものは「どう勝つか」だと思います。これまでも育成年代を指導する上で、「中途半端にやってベスト8に入るぐらいなら、死に物狂いでやって初戦敗退の方がよっぽどまし」と考えてきました。「そこそこの選手を集めてそこそこの練習してそこそこ勝つ」ことを求めているのではなく「勝つために何をやったか」を最も重視しているということです。「絶対に敵わない」と思っていたやつらに勝とうと夢中で努力し、日々打ちのめされてヘシ折られ、それでも信じた道を突き進んだ先にある成長と、時々ご褒美の勝利が得られればそれで最高だな、と。それこそが競技スポーツを通じた人間教育の魅力であり価値だな、と心底思っています。

ただ、だからと言って選手達に「負けてもいいよ」とは絶対に言いません。(矛盾しているように感じられるかもしれませんが)勝負事である以上、やるからには勝たねばなんなのです。戦う前から「頑張れば負けてもオッケーだよ」なんてあり得ないし、頑張ったことで負けを正当化しようとも思いま

せん。でも、「じゃあ勝てれば何でもいいの？」と問われれば、「それは断じて違う」と言い切ることができます。勝つためのプロセスがあり、その結果として勝利を得られるから価値が生まれるのであって、そこを履き違えたくはないのです。勝って勘違いしたり負けて絶望したりするのではなく、全ての経験に意味があるのだということを学んでほしいと思います。

また、選手達には「将来君のパートナーになる人は、サッカー選手としての君を選ぶのではない。サッカーを通して培った人間性に惹かれて君を選ぶんだ」という話もします。この「人間性」とは、「才能」ではなく「努力の成果」です。「サッカーは少年を大人にし、大人を紳士にする」という言葉があるように、挑戦の日々が人を育ててくれます。サッカーに限らず努力を求められる世界では、どこに行っても同じことが言えるのではないのでしょうか。「本気」や「努力」が、勝敗の先にある価値を生み出してくれるのだと思います。

君達が過ごす高校生活は、1000日間の通過点。

新学年に突入していく皆さんの「本気の努力」に期待しています。

頑張れい！！